石川県現代俳句協会会報

第30号
令和４年
２月20日　発行

令和3年度　定期総会開催

令和３年３月７日　石川県女性センター

日　時　令和3年3月7日（日）13時～

場　所　金沢市・石川県女性センター

令和2年度事業報告、決算報告及び令和3年度事業計画、予算を審議、承認された。本年度は役員改選にあたり、新役員は次の通り。顧問・松本詩葉子、島田星花、会長・関戸美智子、副会長・梅木俊平、会計監査・平林啓子。

大会終了後、事前投句（2句×27名）54句による句会を開催。当日参加者15名。

○作品抄　（順不同）

鳴きそうな鶯餅の番いです　大沢　輝一
野火走る鞭を打たれし奔馬のごと　松本詩葉子
鉛筆の文字やわらかく春の虹　舘　百合子
朗読の詩のやう春の雪享くる　梅木　俊平
南中のオリオン低しマメを撃つ　笹次　和子
一度だけの父の拳骨卒業す　亀田　蒼石
川辺りが青ざめている冬木の芽　関戸美智子
寒紅や口角指で引き上げる　伊達　文葉
初めての男子産声春兆す　藤井智穂子
寒の水染屋の幟りの鯉泳ぐ　村田　巴
この里に住みしさだめと雪をかく　藪野　忠行
手の届く幸など要らぬ猫柳　村木ノブヒロ
風紋を乱すブイ蹴る春の浜　森岡　一子
ハモニカに昭和ただよひ暮遅し　島田　星花
生き方を猫に相談日脚伸ぶ　峠谷　清弘
黒屋根にしがみついてる今朝の雪　田中　一良
看護師の明るき声や春を連れ　浅田　正文
体温計も今やデジタル寒明ける　花井　淳
ブナオ山こゑ真っ白に探す鷲　森田　香月
ねずみとり冬ざれの田に捨て置かれ　阿木よう子
骨納め墓地まで青き麦畑　飯田　順子
うららかや川柳欄のペンネーム　野田悠美子
朧夜の密約交わしたる花押　平林　啓子
古雛や求めて買わぬ飾り菓子　坂本眞智子
春霞余生と余命推しはかる　前野　狼騎
室の花百二の母に叱らるる　笠松　香代
口緩む台地も弾む春の風　棚野　智栄

○席題による一句会「水」

春浅し耳を澄ませば水の音　松本詩葉子

つるづると喉走りけり能登水雲　亀田　蒼石
氷河解けベニス水没この地球　村田　巴
土筆摘むもの足りなさや水の音　伊達　文葉
夕暮れの河口に近く鶺の水脈　森岡　一子
父の忌のはんにち遅れ水温む　関戸美智子
眠剤の効くころ春の水が咲く　大沢　輝一
水使う間合い間合いに春の雷　舘　百合子
春きざし水炊そろり終りとす　藤井智穂子
生きてゐるかぎり逃水追ひつづけ　笹次　和子
水餅の水張る桶や山の音　島田　星花
月月火水木金金日永です　村木ノブヒロ
水曜日辺りの疲れ夕霞　梅木　俊平
堰越へし水音日々に深む春　藪野　忠行
一歩出て火の粉あびたしお水取り　棚野　智栄
（棚野智栄　記）

第10回 俳句並びなさい「はがきによる一句展」

○はじめに

大沢　輝一

第10回俳句並びなさい「はがきによる一句展」が令和3年4月28日～5月11日の期間、石川県女性センターアートギャラリーで開催。

昨年度は、コロナ感染防止の一策として、県の出先機関利用閉鎖に会い、やむなく中止。一年後の本年は、いろんな自粛に疲れ、いろんな意味で開催できる喜びを噛みしめています。併せて、二年振りという眼で見ると皆様の素晴らしい俳句作品が出展されたことに幹事一同、感謝しきりです。出展者17名総句73句の中より〝私の好きな句〟を一人一句ですがあげさせて戴きます。

○村田巴の十句選

氷柱つらつらはつらつと赤子泣き　梅木　俊平
川辺りが青ざめている冬木の芽　関戸美智子
借畑の身にあふ広さ鳥雲に　笠松　香代
木の芽風くるみ産着を畳みけり　森田　香月
生国へ心が帰る雪しんしん　阿木よう子
牛舎への轍深深下萌ゆる　野田悠美子
一度だけの父の拳骨卒業す　亀田　蒼石
朗読の詩のやう春の雪亨くる　梅木　俊平
鉛筆の文字やわらかく春の虹　舘　百合子
ハモニカに昭和ただよひ暮遅し　島田　星花
平飼いの鶏のひとこえ春を待つ　飯田　順子

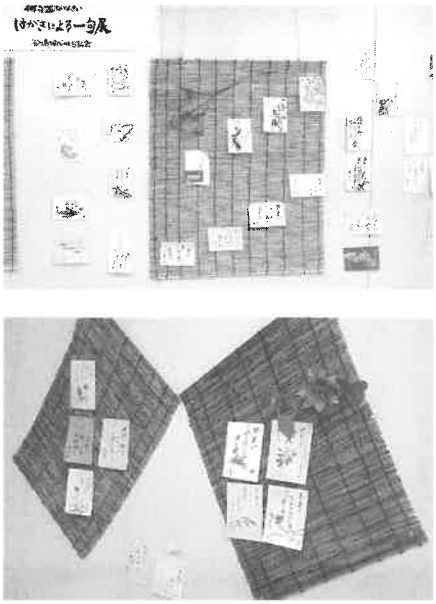
包丁のちからを抜けば烏瓜　関戸美智子
落花浴びをれば昇天する眼（まなこ）　梅木　俊平
熱帯魚ひらり便箋三枚目　島田　星花
隠沼に仄かな山気蝌蚪の紐　小﨑　淳子
鉛筆の先で突っつく春夕焼　村木ノブヒロ
寒風の河畔見下ろす百度石　亀田　蒼石
薫風をつれて戻りし子供たち　松本詩葉子
海よりも空のひろがり夏に入る　舘　百合子
立てて売るサーフボードや春の潮　太田　淳子
春星や今日の匂いの服を脱ぎ　野田悠美子
勾玉に苺一粒児の寝息　村田　巴
切株に一炊のゆめ風花す　笹次　和子
花筏流れて止まりまた流れ　浅田　正文
まんじゅしゃげ悔いのないほど摘みました　阿木よう子
まなかひの米一升や万愚節　伊達　文葉
山々がせり出してくる秋の朝　田中　一良

妻といるふしぎな自由暮の秋　大沢　輝一

＊

◘はがきによる一句展を観て　松本詩葉子

石川県現代俳句協会主催による恒例の「はがきによる一句展」は、今年も女性センターのアートギャラリーにて四月二八日より開催されている。数年前より、関戸会長・亀田顧問の熱意によりスタートしたが、以来年々盛んになり、作品の数も増え充実して来ている。昨年はコロナのため残念ながら中止となったが、今年はコロナはまだ収まらぬものの、作品を展示して静かに鑑賞するのであれば支障ないと会場側の許可を得ての展示である。作品は年を追うごとに、多才で個性が目立つ作品に仕上がっており、見ているだけで楽しい。小さなハガキいっぱいに書かれた墨痕鮮やかな作品から、軽妙なタッチの俳画形式の作品など、バックの簾や白壁に絶妙に配置されていて見飽きることがない。俳句は作ることや句会の楽しみ以外にも、こんな楽しみ方もあるのだと教えてくれる。



＊

◘はがきによる一句展を鑑賞して　浅田　正文

一句展を鑑賞した。先ず句意から。現代俳句は自然を愛でるばかりではなく心の内や社会現象まで自由で実に幅広い。例えば、

秋深しじゃらんと象の脚鎖　輝一

秋が深まり澄んだ日差しの下で、小さな優しい目を持つ象が動く度に鎖が鈍い音を立てる。その音が「じゃらんじゃらん」と聞こえるのも悲しい。作者はひょっとすると象に我が身を重ねたのかもしれない。考え過ぎだろうか。

次に従来の俳句の色紙・短冊のイメージがはがきにより大きく変ったことを実感した。具体的に挙げよう。

・官製はがき、浅黄色などのカラーはがき、手漉き和紙など多様
・はがきを縦または横に使う。いずれ斜めのものが出るかも？
・絵葉書や写真、または自身の絵・写真に、毛筆・万年筆・水性ペン・パソコンで句を加えたもの
・縦書き、横書き、一行書き、5・7・5の三行書き

など自由闊達に多様なスタイルがあり、毛筆・俳画の精神を尊重しつつも、技術進歩を駆使した感が大。垣根が消えた。

＊

◘一句展を見て　平林　啓子

女性センターで開催されていた「はがきによる一句展」を観てきた。表題には「俳句並びなさい」とある。「並びなさい」と言われれば「はいっ」と整然と並んでいるのかと想像していたが、ある一群は庭園の飛び石のように、別の一群はビルの窓のように、趣を変え並んでいた。

七十三句の珠玉の作品たちもそれぞれに個性を放っている。洒脱な俳画や美しい写真が添えられているもの。ついにはサザエさん一家まで現れて見ていて飽きない。筆書きだけのものはシンプルだが味わい深い。

筆者は今回提出しなかったのだが、次回は是非とも参加したい。私の句はどこに並んで、そこからはどのような景色が見えるのであろうか。

＊

◘「はがきによる一句展」鑑賞　伊達　文葉

春の恒例「はがきによる一句展」が、石川県

女性センター一階アートギャラリーに於いて4月28日から5月11日までの15日間開催された。

はがきの大きさではあるが、一句の世界を広げる絵や写真などが、それぞれ作品の個性が十分に引き出していた。

また展示にはすだれが効果的に使われ、初夏を思わせる演出も作品を一層引き立てていた。

展示された作品は、73枚。ゆっくりと俳句の世界に浸れる見応えのある一句展となった。

第30回記念北陸現代俳句俳句大会

〈福井県〉令和3年5月9日（日）、通信制

石川県受賞者

入賞　梅木　俊平

佳作　村木ノブヒロ、関戸美智子

吟行会

★夏季★

日　時　令和3年7月10日（土）

吟行地　近江町市場

句会場　石川県女性センター　参加12名

作品抄

夏鰹地底剥したごと並ぶ　大沢　輝一
戻り梅雨極彩色の果物屋　亀田　蒼石
左手に魚右手に夏野菜　澤田こげら
真向いの市場ざわめく麻のれん　舘　百合子
露地野菜かごにとりどり麦藁帽　棚野　智栄
クレーンの音や市場の中に夏　伊達　文葉
へしこ漬薄切りという涼しさよ　平林　啓子
市場にて双子に出合う桜の実　藤井智穂子
叩き売る声の飛び交ふ梅雨市場　松本詩葉子
風通る魚市手早に鰭捌く　村田　巴
鰻屋の灯り市場に目が慣れて　森岡　一子
市場育ちは人なつこくて夏つばめ　関戸美智子

★秋季★

日　時　令和3年11月14日（日）

吟行地　にし茶屋街（金沢三茶屋街のひとつ）

句会場　石川県女性センター　参加12名

作品抄

格子戸の鋲浮きあがる冬日和　梅木　俊平
風の言葉の支度など見える冬　大沢　輝一
冬どなり昼の灯ともす廓街　舘　百合子
冬の蜂ふはとすれ違つたやうな　伊達　文葉
細格子その奥暗し小六月　野田悠美子
神の留守甘納豆が止まらない　平林　啓子
出格子と小春日和が並んでいる　松井麻容子
ポストの緋茶屋を励まし冬に入る　松本詩葉子
野良猫になりすましゆく茶屋初冬　村木ノブヒロ
素囃子や三弦聞こゆ秋深し　村田　巴
旅人の小走りとなる初時雨　薮野　忠行
秋の蝶格子通りを消えたとさ　関戸美智子

会員作品の広場

（到着順）

父の亡き歳月石に水を打つ　飯田　順子
蚊帳に螢ははのふるさと夢のなか
青柿落つ米寿の齢いただきぬ
紅き実は輪廻のあかし秋深む　森田　香月
走り根は大地の鼓動冬木の芽
刻々と透けるさみどり蟬の羽化
反戦詩土用蜆の白き汁　梅木　俊平
いくたびも絵の具削ぐ画布原爆忌
細りゆく浜　夕虹は母の色
春の園児母の手縫いの翼です　大沢　輝一
部屋干しのシャツ蛇の吐息です

少し硬いが噛むと十一月の味　亀田　蒼石

灯の下の夜なべの妻の鼻めがね　薮野　忠行
ひとにぎり刈りし稲穂の重さかな
やりをへし鰡の横顔夕端居

裸木となり存分に背伸びする　舘　百合子
声出せばそこから動く春の闇
体温を乗せてふらここ暮れてゆく

うすらひや春画の帯の解けをり　村木ノブヒロ
疫病み世にころがっている良夜かな
穴惑ひ昨日の僕と出くわしぬ

フルーツを数多従へ大西瓜　松本詩葉子
縁切るも結ぶも神や松の芯
ギヤマンの春光淡き神の門

苔茂り天地を結ぶ大乗寺　藤井智穂子
貨物車はゆるりと去りて夜の蜘蛛
宝塚主役いずれの菖蒲かな

さつきまで青葉木菟ゐし闇深む　森岡　一子
秋の宿声つつしめば海の音
開け放つ海へ傾斜の三和土冷ゆ

鑑真の深き眼窩や三十才　亀田　蒼石
亀鳴くを聞きに唐招提寺かな
山麓の日暮のはやし雪まろげ

産終へし牛の双眸寒昴　野田悠美子
朝虹や鉄棒しづくして匂ふ
魚の腑を出刃に掻き出す楸邨忌

良夜来て座をゆったり喜寿祝　村田　巴
マラソン人へ太鼓乱打散る木の葉
柿を剥くミサイル飛んだと話しつつ

耳鳴りを忘れてゐたり蛍狩　笠松　香代
逃げ水のうしろは港坂のぼる
廃宿のあるを隠せり葛の花

弱くなる母の筆圧秋時雨　峠谷　清広
あの世から父よ畑を打ちに来い
花吹雪心の中で正座して

透明になるまで梨を食べ尽くす　松井麻容子
触覚を思い出すまで枯野原
大枯野枕詞を探している

亡き母の椅子にからまる冬の蔦　阿木よう子

句会便り

▪「暖響」石川寒雷会

古代蓮傾ぐはしるき思惟ゆえ　宮崎佐和子
奥能登の喉元いやす心天　山下　宏志
一筋の通れるばかりの夏野かな　木澤　裕子
行き止る灯台もとの椅子灼けて　森岡　一子
夕焼を確かめに出る靴の音　紙谷みちよ
風薫る朝風呂あとのケイポップ　桃　叶

（森岡一子　記）

▪「海原」小松支部

題詠〈原〉

素通りし呼ばれたような荻の原
拝啓と戻れぬ故里（くに）の冬の灯へ

栀子の香や少年の耳聡き　太田　淳子
星飛んでアンの空想とめどなし
調停へ風呂敷抱へ十二月

朝からの風を馴らして糸瓜蒔く　関戸美智子
秋の天海のにおいの靴ばかり
落ちそうなところに老僧木守柿

やさしさの容れ物探す冬野原　吉田　朝子

原因は深読みする癖藪柑子　中村ひかり
胃凭れの原因不作の初句会　梅川　寧江
枯野原解毒されるまで歩こう　松井麻容子
吹雪原内臓ひとつ置き忘れ　大沢　輝一

〈雑詠〉

探梅は体全部を使いきり　梅川　寧江
老犬に湯たんぽ太郎薄目あけ　吉田　朝子
自粛なり身体の奥の虎落笛　松井麻容子
雪の足跡行きつくところに家族　中村ひかり
風が風追いかけている枯野原　大沢　輝一

（大沢輝一　記）

▪「狼」俳句会

結び目にぴったりはまった冬の月　阿木よう子
雪が降る嗚咽のように唾のように　佐考　石画
寒日和父の匂いがついてくる　関戸美智子
わが齢すっぽり包む海の冬　舘　百合子
雨降るか錫の器の新走り　岡村　知昭
年果つる逆さに覗く双眼鏡　村木ノブヒロ
冬の日や客は黄泉から古代から　松田　牧子
玄関に咳ひとつだけ置いてくる　松本麻容子
白鳥の首よぐるっと湿布薬　大沢　輝一

（大沢輝一　記）

▪鷹俳句会石川県支部

（令和四年「鷹　令和四年一・二月号」より）

小鼓の緒の橙も小望月　太田　淳子
元支所の時計正しき今朝の冬　亀田　荒太
手を打つて嬰歩ましむ秋桜　亀田紀代子
シャッターをからから上ぐる野分あと　亀田　蒼石
カップヌードル旨し炬燵は弱にして　佐々木ゆみ
風信を添へて里よりスダチかな　椎野千代子
小説の江戸より還り赤い羽根　島田　星花
母ばかり話す電話よ柿もみぢ　鈴木沙恵子
櫻紅葉散る県境の木の駅舎　高岡　郁葉
冷やかや骨董店に鳴る時計　津浦　容子
青みかん小学校が投票所　西村賀世子
使はずの更新旅券露を踏む　野田悠美子
武家屋敷つらぬく流れ石蕗の花　林　るい子
泣いてゐる女の髪や月夜茸　本多　伸也
父母は見合結婚大根干す　宮本ヒロ子
寂しげな顔が出てくる茸山　藪野　忠行

（太田淳子　記）

▲編集後記▼

◇コロナ禍の状況下でありながら、令和3年度の行事も無事終了いたしました。皆様方のご理解ご協力に心より感謝申し上げます。

◇会報第30号をお届けいたします。今号からの〈句会便り〉のページへ、また、一句展への感想を積極的にお寄せいただき、重ねてお礼申し上げます。

◇皆様におかれましては、くれぐれもお体お大切の上、お過ごしになられますよう願ってやみません。

（美）

お知らせ

石川県現代俳句協会
令和4年度 定期総会及び俳句大会

日時　令和4年3月6日(日)　13時～
場所　石川県女性センター　コンベンション室

第11回俳句並びなさい　**『はがきによる一句展』**

日時　令和4年4月28日(木)～5月11日(水)
場所　石川県女性センター一階　アートギャラリー

会報30号　令和四年二月二十日　発行
発行人・編集人　関戸美智子
発行所　〒九二一―八一六二
金沢市三馬一―十九　関戸方
石川県現代俳句協会
電話　〇七六―二四二―九〇二七
郵便振替　〇〇七〇〇―二六六〇七
印刷所　アンド美術印刷社　金沢市醒ケ井町二―三